

風竜王宮殿への襲撃を防ぎきって、しばらく経ったあ
る日。

ルッチラがラックの屋敷の居間でソファに座り、ゲル
ベルガさまを撫でてしていると、ケーテがやってきた。

「お、ゲルベルガさま、ここにいたのであるな」

「ケーテさん、ゲルベルガさまにご用ですか？」

偉大なる竜種の頂点である風竜王ケーテにルッチラは
少し緊張気味に応答する。

「いや、なに。用と言うほどのことではないのだがな！

羽根のある者同士仲よくしようと思っただけだ」

そういつて、ケーテはルッチラの隣に座った。

そしてケーテはポケットの中からムカデを取り出した。

「ひっ！　なんですか、それ」

ルッチラも虫は苦手な方ではない。

だが、突然目の前にムカデを見せられたら、驚おどろいてしままう。

「ゲルベルガさまのおやつにどうかと思つてな」

「そ、そうですか」

「ゲルベルガさま、食べていいのだぞ」

ケーテに搦つかまれたムカデは元気にワシヤワシヤ動いている。

あまりにもおぞましくて、ルッチラは顔を引きつらせた。

だが、ゲルベルガさまは嬉うれしそうにムカデの頭を的確

にくちばしでつつく。

とどめを刺すと、むしやむしやと食べる。

「ゲルベルガさま、うまいのであるか？」

「ここう！」

「もっとあるのであるー！」

そして、さらにケーテはポケットからいろいろな虫を取りだしていく。

「あっ。しまったのだ」

ケーテの取りだした沢山たくさんの虫たちが逃げ出した。

居間を虫たちが飛び回る。

「ロ、ロックに怒おこられるのだ」

「うお！ 凄すごい数の虫だな」

間の悪いことに入ってきたラックが虫を見て驚く。

「……すまぬ」

ラックはしよんぼりしたケーテを見て、それからゲルベルガさまとルツチラを見た。

「いや、気にするな。ゲルベルガさまにおやつをあげようとしたんだらう？」

「そうなんだ！ よくわかったのであるな」

「そりやな。とりあえず、手分けして虫を捕つかまえるぞ」
それからルツチラとケーテ、ラックは手分けして虫を捕まえた。

捕まえるのに数十分がかかった。

ケーテとルツチラは疲れ果てたが、ゲルベルガさまは

捕まえた虫を食べてまんえつ満悦だった